

男女共同参画社会についての青年の意識に関する研究

A study of Attitudes of Adolescents Toward a Gender-Equal Society

神田 信彦*・白石 京子**・松野 真***

Nobuhiko KANDA, Kyoko SHIRAISHI, Makoto MATSUNO

要旨：本研究は、大学生 286 名（男性 100 名、女性 186 名）を対象に男女共同参画社会の実現に関わる意識を検討した。因子分析（主因子法、バリマックス回転）によって、「男女共同」志向と「男女分業」志向の 2 因子が抽出された。分析の過程で両因子は独立の関係が仮定された。「男女共同」志向は、「男女共同参画社会」の意味を知る程度や、家庭の家事の分担等によって影響を受けることが示され、その後の分析からも「男女分業」志向は逆の関係になることはなく、「男女共同」志向と同様の傾向か、あるいは影響を受けないことが示された。

キーワード：男女共同参画社会、男女共同志向、男女分業志向

1. 問題

1999 年に男女共同参画社会基本法が施行され 15 年あまりが経過した。同法第 2 条によれば、男女共同参画社会とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」である。

さらに、同法 3 条から 6 条には、男女共同参画社会を実現するための領域と方策が掲げられている。それらは、男女両性相互による尊重と協力によって「男女の人権の尊重」「社会における制度又慣行についての配慮」「政策等の立案及び決定への共同参画」及び「家庭生活における活動と他の活動の両立」を推進することである。

また、2007 年には「官民トップ会議」において「仕事と生活の調和（ワークライフバランス）憲章」・「仕事と生活の調和推進のための行動指針」が策定された。

国をはじめ各行政体では男女共同社会の実現推進のためにさまざまな努力を重ねている。しかしながらその実現には、まだ相当な期間がかかる可能性が高い。つまり、さまざまな水準で男女

* かねだ のぶひこ 文教大学人間科学部

** しらいし きょうこ 文教大学人間科学部

*** まつの まこと 千葉県中央障害者相談センター

共同参画やライフワークバランスを推進するための制度や支援のための仕組みが作られているものの、しかし従前の社会的慣習や意識が根強く生き続けており阻害要因の一つとなっていると考えられる。

本研究では、それらのうち意識的な面について、今後社会を担っていく大学生世代に注目し検討を進めた。

「男女共同参画社会」に関わる研究はすでに複数行われている。例えば、菱田・加藤・金子(2008)は、大学生を対象に「個人の経済感覚」「父母の就業」等と「男女共同参画意識」との関係を検討し、男女共同参画志向に関わる就業意識に個人の(経済的)バランス感覚が関係していることを示している。また、数見隆生・土井豊・伊藤 常久(2009)や東福寺一郎(2008)による調査研究がある。

2. 目 的

本研究は「従来型の男女分業」を志向する意識と「男女共同参画」を志向する意識を設定し、それらに関係や影響を与えていると考えられる要因や事項の幾つかについて、その関係を検討した。取り上げたおもな要因や事項は、「男女共同参画社会」の意味理解の程度、家庭での家事の家族の分担経験、自分の性による差別経験の程度、及び社会関与への欲求の強さであった。これらが高いほど「男女共同参画」志向が高く、「従来型の男女分業」志向は弱くなることが予測された。また、一般的に男性が恩恵を受けてきた「従来型の男女分業」志向については、男性が女性より強いことが予想され、「男女共同参画」志向については従来不利益を被ってきたと考えられる女性が男性より強いことが予測された。

3. 方 法

- (1) 調査対象(調査協力者) B大学人間科学部学生286名(平均年齢19.83歳(男性100名、同20.12歳;女性186名、同19.68歳)であった。
- (2) 調査票の構成 ①フェイスシートにあたる性別及び年齢、②仕事と家庭の役割に関する「従来型の男女分業」への意識をたずねる9項目(例:「結婚したら女性は家庭に入り、家事や育児に専念することが望ましい」「男らしさ」「女らしさ」は大切にすべきだと思う)、③「男女共同参画」に係わる7項目(例:「結婚したら男性も家事を分担すべきである」「子どもができたなら男性も子育てを熱心に行うべきである」)、④前記②及び③の意識の形成に関わると考えられる、社会への関与についてたずねる7項目(例:「社会的な問題の改善に積極的に関わっていきたい」「社会の動きに関心がある」)や、「『男女共同参画社会』ということばの意味を知っている」「あなたの家庭では、家事を家族で分担していた(分担している)」及び「男性(あるいは女性)だからということで差別的待遇を受けたことがある」で構成された。

なお②及び③については、筆者が行政によって作成された啓発パンフレットや調査資料を基に案出した。また④については、調査協力者の社会への関わりを意識を表すと思われる内容を項目として案出した。また、②~④までの各項目の回答形式は、「よくあてはまる」「あては

まる」「少しあてはまる」及び「あてはまらない」の4件法であり「よくあてはまる」を4点、「あてはまらない」を1点とした。

- (3) 調査実施時期 2012年1月中旬の授業の際に配布し、回答を求め、回収した。
- (4) 倫理的配慮 調査の実施にあたり、調査票表紙に記載された調査回答への協力の自由、途中離脱の保証、個別データではなく統計的結果の利用、秘密の保持等、倫理的に必要な事項を読み上げた上で回答への協力を求めた。

4. 結果

- (1) 「従来型の男女分業」「男女共同参画」及び「社会関与への欲求」の確認

「従来型の男女分業」の9項目と「男女共同参画」の7項目を併せ、因子分析を行った。主因子法を用い直交回転（バリマックス回転）、斜交回転（プロマックス回転）による分析を行ったところ、バリマックス回転による2因子指定による結果が数値及び解釈可能性が適当であると判断された。その結果を示したものが表1である。「従来型の男女分業」の9項目と「男女共同参画」の7項目によってそれぞれの因子が構成されていた。第1因子に因子負荷量が.4未満の項目が3項目あったので得点化の手続きから除くこととした。

さらに、第1因子を「男女分業志向」因子、第2因子を「男女共同志向」因子と名づけた。それぞれの因子を構成する項目の粗点の合計値によってそれぞれへの意識の強さを表すものと仮定した。いずれも得点が高いほどそれぞれの傾向が高い事を示す。なお、それぞれの信頼性係数は、「男女分業志向」が $\alpha=.748$ 、「男女共同志向」が $\alpha=.706$ であった。いずれもそれぞれの傾向の程度を推測するにあたり問題はないと考えられた。

次に、社会への関与に関する7項目について主成分分析を行った（表2）。その結果、第2主成分まで得られたが、第2主成分を構成する3項目は、いずれも第1主成分についても負荷量が高い値を示した。そのため当該の3項目を削除し第1主成分だけを採用することとし「社会関与欲求」と名づけた。なお、これについても4項目の粗点の合計をその傾向の程度示すものと仮定した。高得点であるほどその傾向が高い事を示すと判断される。 α 係数は、.753であり、「社会関与欲求」の傾向の程度を推測するにあたり適切であると考えられた。

なお、「男女分業志向」「男女共同志向」及び「社会関与欲求」それぞれの男女別の平均値と標準偏差は表3の通りであった。それぞれについて性別による平均値の差の検定結果も示した。いずれも男性が女性に比較して有意に平均値が高かった。なお「社会関与欲求」については、その後の分析のために平均値をもとに社会関与欲求高群（平均12.651（標準偏差1.472））・低群（平均8.414（標準偏差1.524））の2群に分けた。平均値差の検定の結果は有意（ $df=284$, $t=-23.764$, $p<.001$ ）であり、高群（ $n=157$ ）と低群（ $n=129$ ）に分割することに問題の無いことが示された。

表1 「従来型の男女分業」を志向する意識と「男女共同参画」を志向する項目に関する因子分析結果

(varimax 回転後の因子行列)

項目内容	共通性	因子	
		1	2
結婚したら女性は家庭に入り家事や育児に専念することが望ましい	.564	.706	
結婚したら男性は仕事、女性は家事が一番である	.435	.628	
世の中には女性にしかできない仕事がある	.383	.578	
世の中には男性にしかできない仕事がある	.360	.562	
「男らしさ」「女らしさ」は大切にすべきだと思う	.296	.524	
子どもができたら女性は仕事を一時辞めて育児に専念すべきである	.259	.509	
結婚したら仕事を辞めて家庭に入りたい	.231	.391	
自分の「性別」に生まれてよかった	.202	.371	
伝統は大切にしたい	.171	.304	
結婚したら男性も家事を分担すべきである	.440		.663
子どもができたら男性も子育てを熱心に行うべきである	.439		.661
就職して、直接の上司が女性でも抵抗感はない	.269		.507
結婚しても仕事を続けたい	.239		.477
家事や育児などの分担はそれぞれの夫婦で話し合って決めればよい	.237		.475
女性が社会進出をもっとすべきである	.215		.461
企業や行政にもっと女性の役職者が増えるべきである	.188		.430
	固有値 (寄与率)	2.501 (15.631)	2.428 (15.175)

KMO=.681; Bartlett の球面性の検定 $p < .0001$; 因子負荷量が、.3 未満数値については記載していない。

表2 社会関与欲求に関する主成分分析結果

	成分		
	1	2	
社会的な問題の改善に積極的に関わっていききたい	.767	-.283	
社会のために役に立つことをしようと思う	.755	-.278	
社会で活躍したい	.752	-.286	
社会の動きに関心がある	.614	-.010	
世の中には不公平なことが多い	.411	.679	
不公正なことには強い怒りを感じる	.488	.491	
今以上に、不公平や差別のない社会になればよい	.356	.364	
今以上に、不公平や差別のない社会になればよい			
	固有値 (寄与率)	2.635 (37.644)	1.074 (15.343)

表3 共同参画、男女分業及び社会関与欲求の平均値 (標準偏差)

性別	男女分業	共同参画	社会関与
男性 (n=100)	15.36 (3.61)	21.72 (2.88)	10.90 (2.67)
女性 (n=186)	14.15 (3.57)	20.98 (3.12)	10.02 (2.50)
合計 (n=286)	14.57 (3.62)	21.24 (3.06)	10.33 (2.60)
性別による平均値の差の検定結果	df = 284, t = 1.966, p = .05	df = 284, t = 2.723, p < .01	df = 284, t = 2.785, p < .01

(2) 検討に使用する項目の性別ごとの分布状況

「男女分業志向」「男女共同志向」との関係を検討するために使用する各項目の回答状況を性別とクロス集計を行い、さらに χ^2 検定を行った(表4, 5, 6)。いずれの項目も χ^2 値は有意であった。調整済み残差の値から、「『男女共同志向参画社会』という言葉の意味を理解している」については「よくあてはまる」において男性が女性に比較して比率が高いことが示された。「あなたの家庭では家事を家族で分担している(していた)」については、「あてはまる」において男性が女性よりも高い比率であり、また、「あてはまらない」では女性が男性に比較してその比率が高いことが示された。さらに、「男性(あるいは女性)だからと言うことで差別待遇を受けたことがある」については、「よくあてはまる」で男性が女性に比較し比率が高いこと、「あてはまらない」で女性が男性に較べその比率が高いことが示された。

表4 性別と「『男女共同参画社会』という言葉の意味を理解している」のクロス集計結果

		「『男女共同参画社会』という言葉の意味を理解している」				合計	
		あてはまらない	少しあてはまる	あてはまる	よくあてはまる		
性別	男性	度数	4	27	36	33	100
		比率(%)	4.0	27.0	36.0	33.0	
		調整済み残差	-1.7	-1.8	.8	2.1	
性別	女性	度数	18	70	58	40	186
		比率(%)	9.7	37.6	31.2	21.5	
		調整済み残差	1.7	1.8	-.8	-2.1	
合計		度数	22	97	94	73	286
		比率(%)	7.7	33.9	32.9	25.5	

χ^2 値=8.719, $p<.05$

表5 性別と「あなたの家庭では家事を家族で分担している(していた)」のクロス集計結果

		「あなた家庭では家事を家族で分担している(していた)」				合計	
		あてはまらない	少しあてはまる	あてはまる	よくあてはまる		
性別	男性	度数	17	29	34	20	100
		比率(%)	17.0	29.0	34.0	20.0	
		調整済み残差	-2.2	-.9	3.2	.0	
性別	女性	度数	53	64	32	37	186
		比率(%)	28.5	34.4	17.2	19.9	
		調整済み残差	2.2	.9	-3.2	.0	
合計		度数	70	93	66	57	286
		比率(%)	24.5	32.5	23.1	19.9	

χ^2 値=12.046, $p<.01$

表6 性別と「男性（あるいは女性）だからと言うことで差別待遇を受けたことがある」のクロス集計結果

		男性（あるいは女性）だからと言うことで差別待遇を受けたことがある				合計	
		あてはまらない	少しあてはまる	あてはまる	よくあてはまる		
性別	男性	度数	29	27	24	20	100
		比率 (%)	29.0	27.0	24.0	20.0	
		調整済み残差	- 3.0	- 1.0	2.3	3.5	
性別	女性	度数	88	61	25	12	186
		比率 (%)	47.3	32.8	13.4	6.5	
		調整済み残差	3.0	1.0	- 2.3	- 3.5	
合計		度数	117	88	49	32	286
		比率 (%)	40.9	30.8	17.1	11.2	

χ^2 値 = 20.942, $p < .0001$

(3) 目的の検討

「男女分業志向」得点に関係する要因を検討するため、性別と、「『男女共同参画社会』という言葉の意味を理解している」「あなたの家庭では家事を家族で分担している（していた）」「男性（あるいは女性）だからと言うことで差別待遇を受けたことがある」及び社会関与欲求の高低それぞれを独立変数とそ「男女分業志向」を従属変数とする2要因分散分析を行った。

結果は表7及び表8の通りであった。いずれの分析も交互作用は得られず、「『男女共同参画社会』という言葉の意味を理解している」と社会関与欲求の高低の主効果がそれぞれ有意であった。前者について、bonferroni法による多重比較 ($p < .05$) を行った結果、「よくあてはまる」群と「あてはまる」群は「少しあてはまる」群に比較し、男女分業志向得点が高かった。後者については、社会関与欲求高群が同低群に比較し男女分業志向得点が高いことを示していた。なお、性差について4つの分析全てで有意であった。前述のt検定と同様の結果であった。

表7 「男女分業志向」得点を従属変数とする分散分析の結果

独立変数	df	F値	有意水準
性別	1	4.212	$p < .05$
「男女共同参画社会」という言葉の意味を理解している	3	4.546	$p < .01$
交互作用	3	0.804	<i>n.s.</i>
性別	1	4.961	$p < .05$
あなたの家庭では家事を家族で分担している（していた）	3	2.091	<i>n.s.</i>
交互作用	3	1.176	<i>n.s.</i>
性別	1	7.388	$p < .01$
男性（あるいは女性）だからと言うことで差別待遇を受けたことがある	3	0.649	<i>n.s.</i>
交互作用	3	0.191	<i>n.s.</i>
性別	1	3.880	$p < .05$
社会関与欲求（低群・高群）	1	12.567	$p < .001$
交互作用	1	.110	<i>n.s.</i>

表8 「男女分業」得点を従属変数とした分散分析の結果（有意な効果が得られた結果のみ記載）

主効果のあった独立変数		平均値	標準偏差	主効果及び多重比較の結果
「男女共同参画社会」という言葉の意味を理解している	①あてはまらない (n=22)	15.682	3.969	④③>②
	②少しあてはまる (n=97)	13.485	3.458	
	③あてはまる (n=94)	14.840	3.431	
	④よくあてはまる (n=73)	15.342	3.675	
	全体 (n=286)	14.573	3.622	
社会関与欲求	低群 (n=157)	13.803	3.536	—
	高群 (n=129)	15.512	3.514	
	全体 (n=286)	14.573	3.622	

次に、「男女共同志向」得点についても同様の分析を行った（表9、表10）。交互作用が得られたのは、社会関与欲求と性別を独立変数とする分析であった。単純主効果について検討を行った結果、社会関与欲求低群の中で男性より女性が有意に低い「男女共同志向」得点であることが明らかとなった。

他の3つの分析では性別以外の主効果が得られた。それぞれについて多重比較 ($p < .05$) を行った。「『男女共同参画社会』という言葉の意味を理解している」については、「よくあてはまる」群は他の3群に比較し有意に「男女共同志向」得点が高かった。「あなたの家庭では家事を家族で分担している（していた）」については、「よくあてはまる」群が「少しあてはまる」群及び「あてはまらない」群に比較し有意に「男女共同志向」得点が高かった。さらに「男性（あるいは女性）だからということで差別待遇を受けたことがある」については、「よくあてはまる」群が「少しあてはまる」群、「あてはまらない」群に比較し、「あてはまる」群が「あてはまらない」群に比較しそれぞれ有意に「男女共同志向」得点が高いという結果が得られた。

表9 「男女共同志向」得点を従属変数とする分散分析の結果

独立変数	df	F値	有意水準
性別	1	2.31	n.s.
「男女共同参画社会」という言葉の意味を理解している	3	10.426	$p < .001$
交互作用	3	0.483	n.s.
性別	1	3.387	n.s.
あなたの家庭では家事を家族で分担している（していた）	3	8.438	$p < .001$
交互作用	3	0.743	n.s.
性別	1	0.541	n.s.
男性（あるいは女性）だからと言うことで差別待遇を受けたことがある	3	6.226	$p < .001$
交互作用	3	1.777	n.s.
性別	1	0.860	n.s.
社会関与欲求（低群・高群）	1	23.760	$p < .001$
交互作用	1	4.355	$p < .05$

表 10 「男女共同志向」得点を従属変数とした分散分析の結果（有意な効果が得られた結果のみ記載）

	独立変数 / 交互作用	平均値	標準偏差	多重比較の結果
『男女共同参画社会』 という言葉の意味を 理解している	①あてはまらない (n=22)	20.045	3.592	
	②少しあてはまる (n=97)	20.289	2.735	
	③あてはまる (n=94)	21.170	2.902	④>③②①
	④よくあてはまる (n=73)	22.945	2.783	
	全体 (n=286)	21.238	3.056	
「あなたの家庭では 家事を家族で分担し ている (していた)」	①あてはまらない (n=117)	20.671	3.105	
	②少しあてはまる (n=88)	20.495	3.126	
	③あてはまる (n=49)	21.530	2.819	④>①②
	④よくあてはまる (n=32)	22.807	2.539	
	全体 (n=286)	21.238	3.056	
男性(あるいは女性) だからと言うことで 差別待遇を受けたこ とがある	①あてはまらない (n=70)	20.436	3.089	
	②少しあてはまる (n=93)	21.307	2.649	④>①②
	③あてはまる (n=66)	21.878	2.766	③>①
	④よくあてはまる (n=53)	23.000	3.510	
	全体 (n=286)	21.238	3.056	
社会関与欲求×性別	①男性・社会関与欲求低群 (n=41)	21.122	3.180	
	②男性社会関与欲求高群 (n=59)	22.136	2.596	
	③女性社会関与欲求低群 (n=116)	20.026	2.962	①>③
	④女性社会関与欲求高群 (n=60)	22.557	2.738	
	全体 (n=286)	21.238	3.056	

5. 考 察

因子分析によって抽出された「男女分業志向」と「男女共同志向」は直交関係にあった。つまり両者は、「男女分業志向」得点が高ければ「男女共同志向」得点が低いといった「負の相関関係」もないそれぞれ独立したものであることが示唆された。

「男女分業志向」得点と「男女共同志向」得点それぞれの平均値について性差をみると、両変数とも男性が女性よりも有意に高い平均値を示していた。「男女分業志向」については、男性優位な社会を支持する内容で構成されているため、男性が高い平均値となる可能性は考えられた。しかし、「男女共同志向」に関しては女性が高いか性差がないことが予想されたが結果は上に述べたとおりであった。この理由の一つのとして、男性の回答者に「よくみせよう」という社会的望ましさのバイアスが作用した可能性を挙げることができる。

「男女分業志向」得点に関係したのは、『男女共同参画社会』という言葉の意味を理解している」の選択肢による群分けと社会関与欲求であった。しかし予測に反し、「よくあてはまる」群と「あてはまる」群が「少しあてはまる」群よりも高得点であり、また社会関与欲求高群が低群よりも高得点であった。このことは、男女共同参画社会に関する認知や社会への関わりへの期待が、必ずしも「従来型の男女分業」の否定にはつながらないことを示している。回答者は、本研究で使用された6項目が直接に女性（や時に男性）の差別にはつながらないと考えたのであろうか、あるいは一般的にある社会的現象について考えれば、長所と短所とが併存すると考えられるので、それらの項目内容から長所部分を連想したのであろうか。このことは、制度を整備し、さらに男女共同参画社会がよいことであり、従来型の「男女分業志向」が問題であると指摘するだけでは、男女共同参画社会の実現はいつになるかわかならないということを示すものと考えられる。

一方「男女共同志向」得点に関する分析では、「男女共同参画社会」の意味をよく知っている群はそれ以外の群に比べ「男女共同志向」得点が高く、同様に、家族による家事の分担をよく行っている群は「少しあてはまる」か「あてはまらない」群よりも「男女共同志向」得点が高かった。性による差別的経験を受けたことがあることについて「よくあてはまる」群は「少しあてはまる」「あてはまらない」よりも、「あてはまる」群は「あてはまらない」群よりも「男女共同志向」得点が高かった。これらは当初の予測と概ね対応するものであった。家事を家族で分担するという家庭のあり方が、男女共同参画意識への促進的経験となると考えられ、被差別的経験が同様に促進的要因として働いた可能性があると言える（被差別経験を奨励しているわけではない）。

さらに、「男女共同参画社会」についてその意味をよく知っているという認知は、「男女共同志向」を高めていることは、どのように理解されるのであろうか。上に挙げたような先行経験がその情報への注目や接近を促進し、「男女共同志向」の受容をさらに促しているのかもしれない。

社会関与欲求と性別は、交互作用を示していた。低群の女性は男性に比較し、「男女共同志向」得点が低いことが明らかとなった。これは社会関与欲求高群では男女に差はみられず、低群よりも同得点は高かったことをあわせて考えると、興味深い結果である。低群の女性はジェンダーを強く身につけているのだろうか、生得的要因によるのだろうか、両方の要因が関与しているのだろうか、あるいは全く別の要因によるのだろうか。

社会関与欲求低群の女性は、文字通り考えれば社会で自分の能力を発揮し活躍することを望んでいない人たちである。しかし、男女ともに社会関与欲求低群は、同高群に比べ「男女分業志向」得点も低かったのである。これを考慮すると、男性も含めた社会関与欲求低群の人たちは、「男女共同参画」や「従来型の男女分業」に由来する男性優位社会に関することにそれほど強い関心を抱いていないと考えることが妥当であるように思われる。

本研究では、男女共同参画社会形成に寄与すると考えられる要因や事項の幾つかを示すことができた。しかし、そのことが男性優位を維持するあり方を肯定する意識を低下させるものではないことも示された。このことは男女共同参画社会実現するための制度や支援体制、その啓発活動だけでは、その実現までにはさらに時間を要することを教えてくれる。

また、家庭と仕事ということに関して今回の結果から、女性であっても男性であっても社会で活躍するより家庭にあって子育てや家事に勤しむことが性に合うという人もいるだろう。それを自分の意思で選択したり、パートナーと話し合う中で決めていけることも大切であろう。こうしたことを含みながら、家庭、地域、社会の中でその構成員が協力し合ってそれらを維持し、発展させていくことが求められるであろう。生まれながらの属性や出自によらず、自他ともに納得する「適材適所」を実現していくことが求められよう。

なお、本研究で取り上げた要因は、私たちの生活や意識のわずかな側面に過ぎない、今後更により多くの要因を検討することが求められる。

注

本研究は文教大学附属生活科学研究所の共同研究プロジェクトの1つとして行われたものである。

引用文献

- 菱田陽子・加藤 礼子・金子劭榮 2007 大学生等を対象にした男女共同参画意識の分析(1):家庭環境の影響を中心として 日本教育心理学会総会発表論文集(49), 645.
- 菱田陽子・加藤 礼子・金子劭榮 2007 大学生等を対象にした男女共同参画意識の分析(2):家庭環境の影響を中心として 日本教育心理学会総会発表論文集(49), 646.
- 菱田陽子・加藤礼子・金子劭榮 2008 大学生の男女共同参画意識に関する分析:家庭の影響・就業意識を中心に 北陸学院短期大学紀要, 40, 143-157.
- 数見隆生・土井豊・伊藤 常久 2009 宮城教育大学学生のジェンダー意識の現状と課題:一般大学生との比較調査から 宮城教育大学紀要 44, 109-123.
- 内閣府男女共同参画局 2015 国・地方公共団体における「見える化」<http://www.gender.go.jp/policy/mieruka/government.html>
- 東福寺一郎 2008 短期大学生の男女共同参画意識:質問紙調査に基づいて(調査), 三重短期大学紀要, 56, 19-28.
- 東福寺一郎 2012 短期大学生の男女共同参画意識(II):1年生から2年生にかけての意識変化(社会, ポスター発表)日本教育心理学会総会発表論文集(54), 576.